



プレゼンは「発表」ではない。

一方向の伝達から、双方向の「対話」へ。思考を拡張するコミュニケーションの技術。

なぜ私たちはプレゼンテーションを行うのか？

「他者との対話は人間の成長と密接な関係がある。自分ひとりの力だけでは考えが広がらなかったり、新しいアイデアが思いつかなかったりする。」



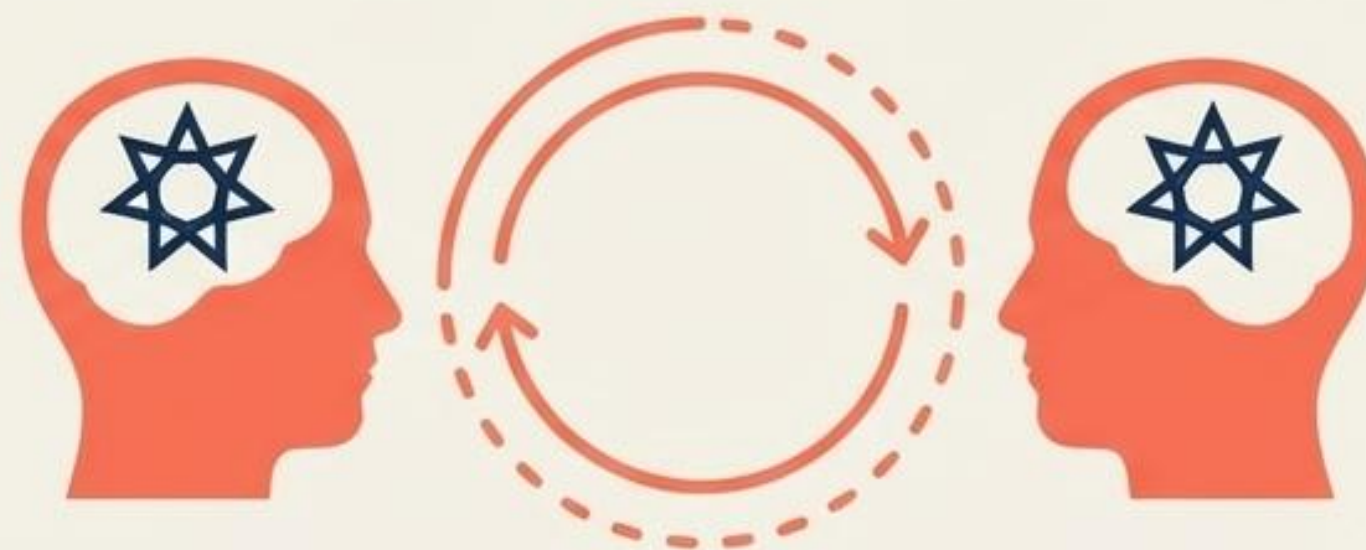
フィードバックがなければ、イメージは歪む。

コミュニケーションの解像度モデル

A: 言葉だけで伝達（質問不可）



B: 言葉だけの対話式伝達（質問可）



情報は「言った」だけでは伝わらない。相手からのフィードバック（質問・反応）をループさせることで初めて、お互いの頭の中にある「図形」が同期する。

「分かりやすい説明」の骨格をスキャンする。

情報構造のX線スキャン (X-Ray Matrix)

Aくん - 思いつき型 / Chronological

「ハワイの中心都市は
オアフ島のホノルルで...」

「東京から約6,000km離れた...」

「ハワイの基本情報としては...」

✕ 情報が思いつきで並んでおり、
聞き手は全体像を掴む前に迷子になる。

Bさん - 結論・全体像先行型 / BLUF

[全体像]
「ハワイの基本的な説明をします。」

[位置・構成]
「東京から約6,000km
離れた...」

[詳細]
「中心都市は...
人種構成は...」

◎ 全体像から詳細へ。構造が整理されているため、聞き手の脳に負担をかけない。

表現力は「調整可能なパラメータ」である。

The Delivery Equalizer (伝達のイコライザー)



システムダウン状態 (System Down): 「原稿棒読み」「原稿しか見ていない」「発表者の声が小さく、表情が暗い」——これは全スライダーがゼロに落ち切った状態。聞き手との接続が完全に切断される。

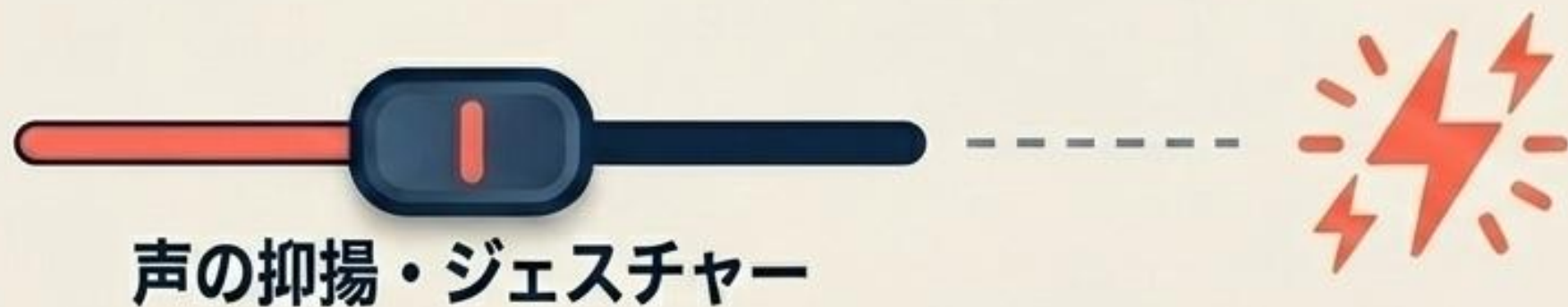
各パラメータは、聴衆と繋がるためのインターフェース。



→【聴衆の「？」を読み取るセンサー】
相手の表情やうなずき（傾聴の姿勢）を確認し、伝わっているかをリアルタイムで測定する。

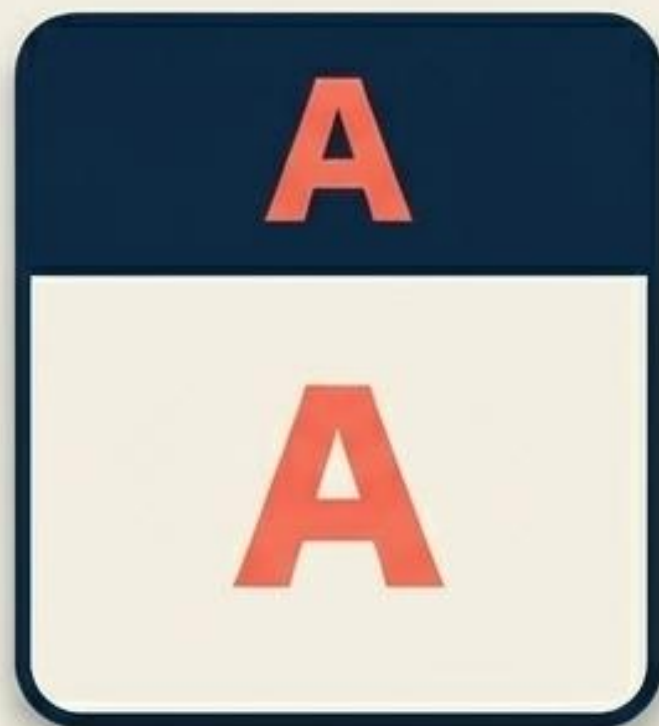


→【頭の中でイメージするためのロード時間】
重要な情報を出した後、早口で畳み掛けるのではなく、相手の脳内に情報が定着する「空白」を意図的に作る。



→【感情のハイライト機能】
「ここが重要だ」という意気込みとテンションを物理的に可視化し、相手の注意を引きつける。

3つの対話型ミッション：データをどう料理するか？



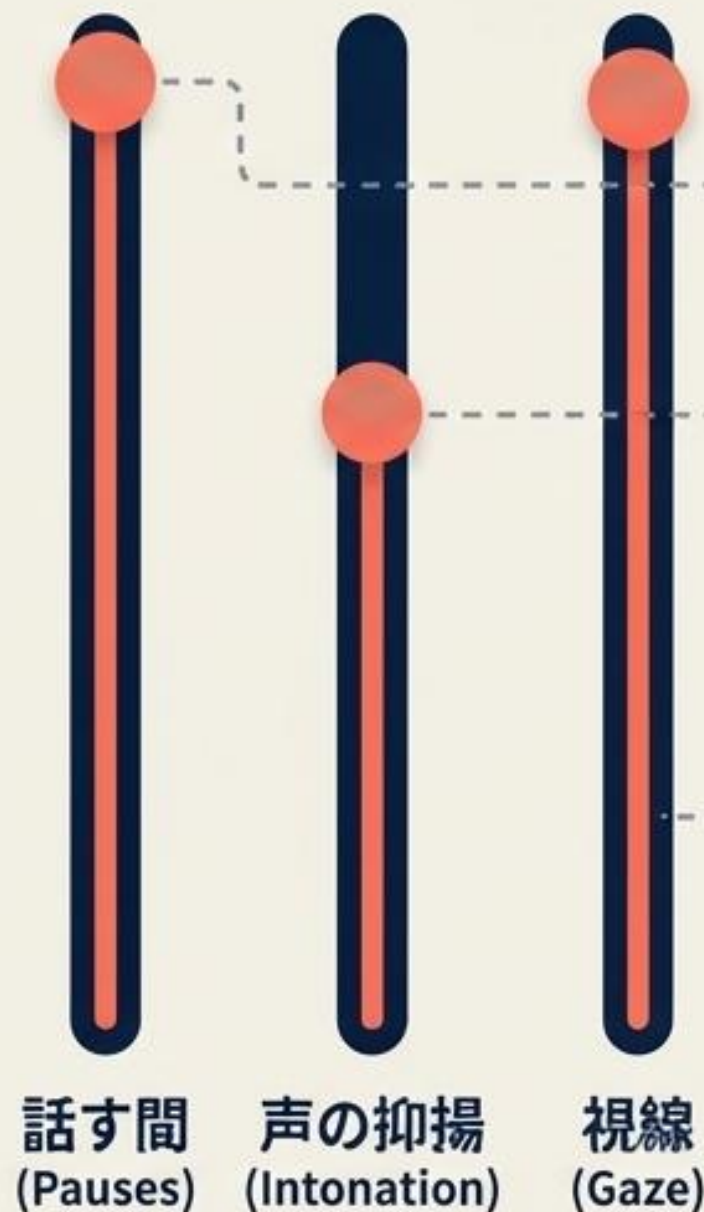
提示されたテキストは単なる「文字の羅列」に過ぎない。あなたの任務は、この無機質なデータに対し、8つのパラメータ（イコライザー）をどうチューニングすれば、聞き手の心に特定一定の「リアクション（驚き、危機感、納得）」を引き出せるかを設計することだ。

 次のスライドから、各ミッションの最適なチューニング例をシミュレーションする。

Mission A: 数字の重みを響かせる 「超高齢化社会」

RAW TEXT

「2050年に日本人の平均寿命は、男性で84.9歳、女性は90.3歳...新たに566万人の高齢者が増える。都市では2.5人に1人が65歳以上...100歳以上人口は2015年の5万3000人から44万1000人になる」



MAX: 巨大な数字の後には必ず深い沈黙を作り、絶望感や規模感を想像させる。

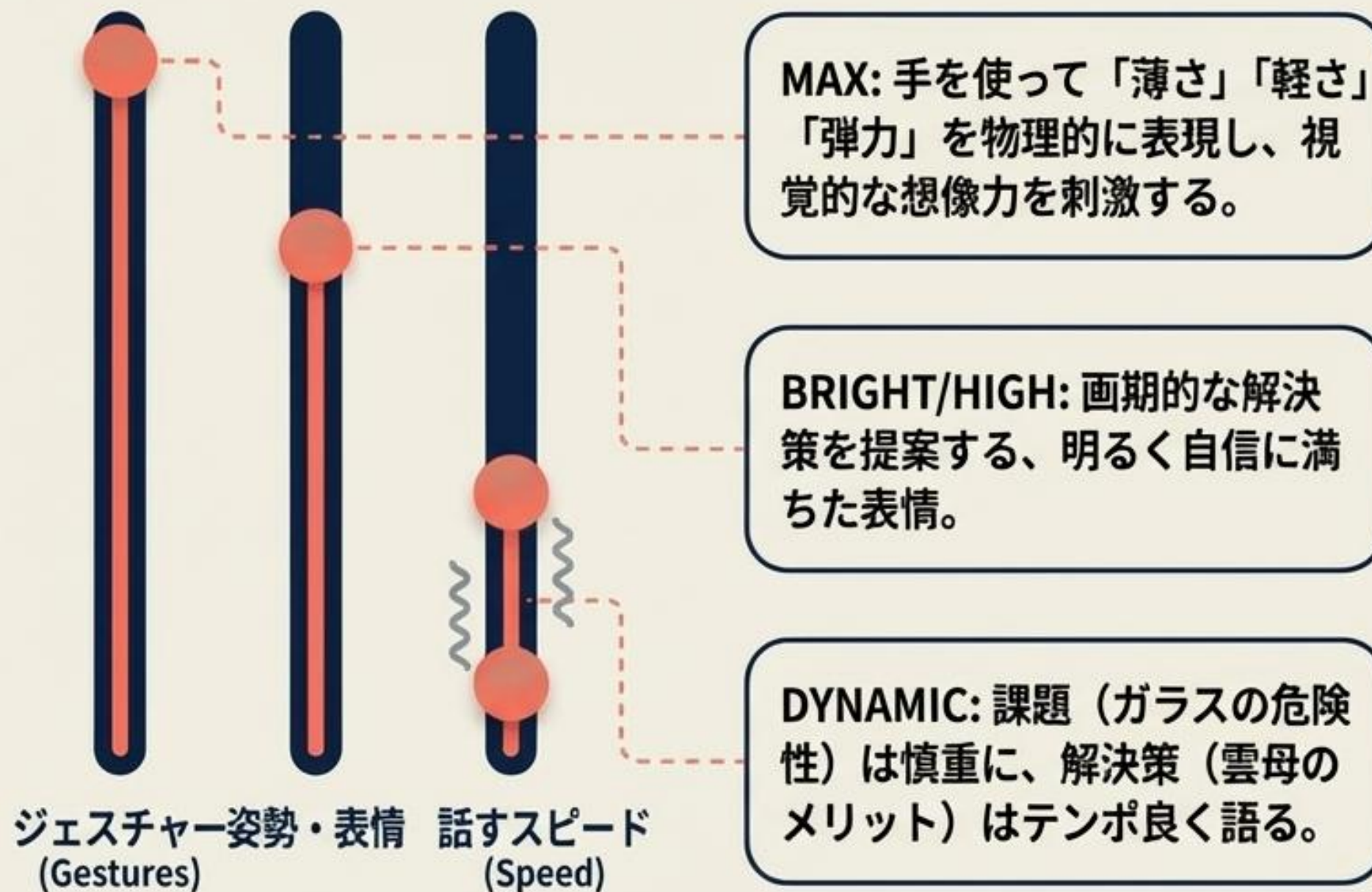
HIGH: 「5万3000人」から「44万1000人」への激増を声のトーンで対比させる。

DIRECT: 一人一人の目を見て、これが「私たちの未来」であるという当事者意識を突きつける。

Mission B: イノベーションの驚きを伝える「新素材・雲母」

RAW TEXT

「地球で一番危ないのは高層ビルのガラスでしょう。だから雲母に変えたらどうだろう。雲母はひびも入らないし、落ちてても割れない。もちろん光も通す...100℃くらいに熱しても反対側手で触っても平気...更にガラスより薄くて軽く...」



Mission C: 選択を迫る警告 「地球規模の気候変動」

RAW TEXT

「私たちが地球という惑星全体の運命を考える際には、何が危険にさらされているのかをしっかりと見極めなければならない。地球の平均気温は15°Cであり、今後の気温上昇をあと1°Cにおさえるのか、3°Cまで許すのかによって、数十万種の生物と数十億人の人間の運命が決まる。」

声の大きさ
(Volume)



CONTROLLED/DEEP: 単に叫ぶのではなく、低く響く声で事態の深刻さを表現する。

PIERCING: 「数十億人の人間の運命が決まる」の瞬間、原稿から完全に目を離し、聴衆を真っ直ぐに見据える。

アイコンタクト
(Eye Contact)



あなたのチューニング次第で、同じテキストが全く違う「対話」を生む。
さあ、あなたの声で情報を起動しよう。



THE WORST PRESENTATION CHALLENGE

最悪のプレゼン体験ミッション

次ページの指示書（台本）に従い、「失敗するプレゼン」を意図的に演じてください。
観客にどれほどのストレスを与えるか、身をもって体験するミッションです。

【演習指令】 最悪のプレゼンターを演じよ



声と表情

- ・発表者の声が小さく、表情が暗い

- ・原稿を棒読み

ロボットのよう暗く、ボソボソと話せ。



視線と姿勢

- ・原稿しか見ていない

- ・発表することに夢中で聞く側の反応にまで目を向けられていない

紙から絶対に目を離さず、観客を完全に無視しろ。



内容

- ・内容がまとまっておらず何を言いたいのかわからない

結論を隠し、思いつきでダラダラと話せ。

なぜ「最悪」に感じたのか？

失敗パターン



成功パターン



プレゼンテーションは「**原稿の音読**」ではありません。
観客の反応を見ながら繋ぐ「**双方向のコミュニケーション**」です。